

トピックス
1. 播州日誌 越南（ベトナム）紀行



福留経営労務管理事務所
 姫路龍馬会
 保険労務士・行政書士
 福留章

<h1>龍馬通信</h1>	No. 70
	2023年10月号

寒露～霜降の候 稲穂に秋茜（あきあかね～赤とんぼ）

日中の気温は 高く長く史上最高
 残暑厳しく 記録づくめの9月
 流石の夏も 10月の声に押されて
 暑さの余韻を残しながら スローダウン
 流れゆく雲は すじ雲 うろこ雲

黄金に実った稲穂の上に
 秋茜が飛び交う
 日本古来の原風景
 古人は 日本を「秋津洲（あきつしま）」と呼ん
 だ
 神武天皇は 日本国中を鳥瞰（うかん）して
 「秋茜が交尾している姿に似ている」と言った
 おおらかで明るい日本の秋

西側から見れば 東側は「悪魔の国」
 ロシアは多くの味方を失って
 どうとう北朝鮮に秋波を送る
 武器給与と 人道支援の物々交換
 長引くウクライナ戦争
 戦争を始めた国が
 戦争を終わらせることができない現実
 大国 中国はどう動く



秋の清々しさを そっとしておいて欲しい
 紅葉前線は やがて南下を始め
 北国では大急ぎで冬支度
 暑さに疲れた人々も やっと一息
 収穫の秋 ぶどう 梨 柿 栗などは最高の
 旬を迎える

五穀豊穰 神に感謝する秋祭りの笛太鼓
 日本人は「祭りの後」の寂しさも先刻承知で
 その分祭りを精一杯楽しむ
 祭りが終わればさすがに多くの人が
 冬支度を考える 北国の暗く厳しい冬

秋の日は短く 夜は長い
 もの思う人にとって
 今年はどんな1年であったか
 冷気を含んだ 澄んだ空気
 もの思うのになんかの季節
 せめて心に太陽を
 明るく楽しく幸あれと祈る

木枯らし吹く 冬の到来を前に
 しばし休憩の季節を
 心から慈しみ喜んで日々の生活を送る
 小さな幸せほど幸せなものはない
 大きな幸せよりも 喪失感が少なく済む

インバウンドの報に思う
 オーバー・ツーリズムにならぬよう
 静かに「日本の秋」を
 楽しんでほしいと思う



播州日誌

越南（ベトナム）紀行 その1 奔流・怒涛のごとく

2023. 9. 24 現地時間15時05分。ベトナム社会主義共和国ホーチミン市タンソンニャット空港に到着。技能実習生の受け入れ採用面接の為、事業主のT社のN社長に同行しての訪問である。第1日目は空港からホテルに直行して、夜の食事会に備える。迎いのヴオンさんアインさんと固い握手。事前に写真をメール交換していた。

旅人はとりあえず空港を出て間もなく、この国の名物と遭遇することになる。それは車を取り巻くバイク（単車）の群れ。群れというより「奔流（ほんりゅう）」というべきかもしれない。ありようを表現するには、筆者の能力が乏しすぎる。旅行中この特徴的なすさまじい社会現象をどう表現すべきかが脳裏から離れなかったが、とりあえず拙文を顧みず書いてみることにする。

公共交通手段がほとんどない現実の中でバイクが果たす交通手段は抜き差しならぬものであり、近くであれ遠くであれ、通勤であれ商用であれ、彼らからバイクを切り離すことはできない。ホーチミン市の人口は1200万人。その人口の多くがホンダ（バイクの代名詞、単車）を所有し、生活のすべてに関する移動手段の面で機能している。ホンダなしでは日が暮れないのである。とにかく助手席に座ることはご免被る。脚が突っ張ってしまうからである。バイクの奔流は渦を巻いて回転し停まることは許されず、流れに沿うことが安全であり命を守ることになる。車側から見れば両サイドギリギリに走行しており、2人乗り3人乗りは当たり前、まさに一触即発の状況だが事故にならないのが不思議だ。



前後左右だけではなく、斜めから突っ込んでくるものもあるし、フェンダーミラーをかすめて車の前に出るのは当たり前、車の直前に現れることもある。まるで変幻自在、異次元の世界なのである。緊急を示す警笛は鳴りやまないが、馬耳東風、聞こえないふりをしているようにも見える。警告音には一定の意味があり、それにより暗黙のルールが成立している。バイクの奔流は、時には激しく時にはやや緩やかにうねり盛り上がる。妻は夫の腰にしがみつき、子は母の胸に押し抱かれる。親子共闘だ。交通の主導権がバイクにあることに疑いの余地はなく、わずかばかりの車の存在はどちらかというと無視されている。圧倒的多数のバイクは我もの顔で道路を疾走する。信号以外で止まることは命を失うことに繋がる。命がけの走行に、命の保証はなく、すべて自己責任となる。

4日間の滞在の中で、バイクの奔流の中に何度も放り込まれたが、なるべく気にしないようにしていたが、怒涛のように押し寄せる奔流に、肝を冷やし、脚を突っ張り、やがて軽いめまいを感じるようになった。少々郊外に出てもこの現実が変わることなく、旅人の繊細な神経など、素どおりしていく。当たり前だ。明日を生きるためには、今日を生き抜かなければならない。彼らの本能は明日の糧を求めて疾走しているのだ。この力強さ、逞しさ、しぶとさ、我慢強さがこの国の経済の発展を支えている。ベトナムは燃えている。熱い情熱を燃やし続けている。

バイクが多い分CO²を始め排気ガスの充満は著しい。天気の良い日でも市中ではガスが拡散してぼんやりと

曇っている。ヘルメットとマスクはコロナ禍後と言っても手放せない。雨季のベトナムでは、1日に何度かスコールに見舞われる。ゲリラ豪雨のような雨に彼らは即応しひたすら止むのを待つ。バイクには合羽が常備されている。スコールは激しいが町中に漂うガスやほこりを沈め、ほんのひと時ではあるが、快適な空間を現出する。旅人はそっとそんな時に深呼吸をして気持ちをほぐす。

ベトナムには昭和のにおいを感じる。それも濃厚な生きざま或いはすさまじさの匂い。高度経済成長の再現。夜10時を過ぎててもこの街は眠らない。バイクの奔流は少し勢いを失ったが相変わらず渦を巻いている。飲食店のネオンも華やかに光を放っている。そこには明日を生きる人たちの息づかいが溢れている。

ヴオンさんとの会話。ベトナムには「うつ」がないと、正確に言えば「うつ」をやってるヒマがないと。飽食の日本。すっかり忘れてしまった、我慢すること、耐えること、生きること、生き抜くこと。ベトナムでの自殺者は日本のその数%に過ぎないとのこと。享樂の中で沈みゆくわが日本。逆戻りはできないけれど、立ち止まることはできるのではないかと思う。第一夜の食事会を終えて早々にホテルに戻る。明日の面接に備えて。

越南（ベトナム）紀行 その2 面接・家族面談・食事会

25日9時に迎えに来てもらって約30分。送り出し機関であるロータスオーシャン社に到着。ホア会長、フン副会長らの挨拶を受ける。すでにテストと面接の準備がされていた。すぐにテストを開始する。養鶏業採用3名のところ9名の応募。いずれもオーシャン社が運営する日本語学校の生徒。18歳～23歳までの若い人たちである。テストは視力テスト、器用さ（大豆を箸で別の皿に移動させる）体力テスト（5キロのダンベル2本を、両手で腰の高さまで持ち上げる）。学校の方で一次選抜してくれているので、いずれも合格点。但し視力は裸眼で検査するとかなり悪い子もいて、日常的に眼鏡を必要とするものも何人かいた。続いて3人ずつのグループ面接。ここでは主に日本語力と協調性、明朗さなどを中心に見る。BMサービスからもリモートで面接に参加してもらい万全を期した。昼食はベトナム料理を代表する「フォー」。昼食もそこそこに検討会。接戦にはなったが3名の採用決定者を決め、再度面接。契約書にサインをもらい写真撮影。3人の喜びようは半端ではなく笑顔満面だった。こちらもうれしくて涙が出そうになった。事前に告知はしてあったが、出身地の親御さんに連絡して明日の家族面談と食事会に備える。通常食事会まではしないがN社長の発案で、せっかく遠方から来てもらうのに食事ぐらいは一緒にしたいとの趣旨で決まった。ホテルで休息後食事会へ。会長、副会長自ら接待していただきベトナム料理を満喫。その後副会長の案内でカラオケへ。衛星カラオケだったので日本語の歌を思いっきり歌った。

3日目の朝。9時半に迎えに来てもらって再びオーシャン社へ。3人の採用決定者とその家族5名の方と面談。質問を受けたりしたが、N社長の熱弁に安心したのか仕切りにうなずいていた。食事は焼肉ランチ。家族ともどもお腹いっぱい食べてくれた。食事会をやってよかったと思った。写真撮影と固い握手を交わし、3人の採用者にはしっかりと日本語を学ぶように訓示した。

夜、瀬名社長とカハン副社長の案内でサイゴン川のクルージングディナー。デッキから見たサイゴン・スカイデッキ（展望台・タワーマンション）など美しい夜景を満喫。地元の人だけでなく欧米からの観光客も多く、国際的な雰囲気漂う。お互いにカメラのシャッターを切り合ったりしている。船上でのベトナム料理は食べ飲み放題で私は333ビール（バーバーバー）好んで飲んだ。生春巻きなどホーチミンの名物料理を堪能した。



4日目。9時半にホテルをチェックアウト。今日の深夜便 28日0時10分発で帰国となる。それまでの時間ヴォンさんらの案内で買い物とメコン川の川下り。近代的とは言えない超アナログの世界。まずハチミツ島でハチミツ茶のパフォーマンスで、ローヤルゼリーを買わされ、蛇を首に巻かれ、民謡らしきものを7人の歌手が次々現れ歌う、フルーツの盛り合わせが出てチップを取られ、やせこけた馬が曳く馬車に乗り、メインイベントは手漕ぎボートで密林の小川を下る。最後は生キャラメルの製造場。仮にも清潔とは言えない。

N社社長は愛想がいいので次々とと言われるままに買わされていた。ヤシの葉で葺いた屋根の下の小屋でランチ。

この川で取れた魚の丸揚げ。身をほぐして春巻きに。これまたローカル色豊かな味でたくさんいただいた。2時間余りを引き返してホーチミン市に戻り、最後の食事。あえて日本食を希望せず結局ベトナム料理で通した。海鮮と揚げ豆腐の鍋のようなものは圧巻だった。8時過ぎにヴォンさんらと別れた。滞在中本当に心からのおもてなし感謝、感謝しかありません。ロータスラウンジで4時間ほど過ごし、日付けの変わった28日0時10分の深夜便で帰国の途に就いた。遠ざかるベトナムの街の明かりを眼下に眺めつつ、思い出だけを抱きしめていた。

越南（ベトナム）紀行 その3 ベトナム料理のことなど

ベトナム料理と言っても北と南とでは随分違う。ホーチミンの人はハノイの料理は単純でまずい、ホーチミンの料理は多彩でおいしいと言う。料理に華やかさはない。日本料理のような色彩や繊細さはなく、韓国料理のようにストレートでもない、中国料理の華やかさはない。ベトナム滞在中、昼・夕食はベトナム料理で通した。フォーは色々なトッピングが楽しかったし、春巻きの類は多彩でコイコンヤやチャーソーも美味だった。生春巻きのもちもち感も捨てがたい。パインセオはお好み焼きのようなもので色々な具を試して食べた。空心菜は濃厚な緑の野菜で軽く炒めたものは絶品。究極の健康食でおいしいものを挙げれば枚挙にいとまがない。実質的な栄養を重視していることがエネルギッシュなベトナム人の生活を支えているのではないかと思う。ビールは何といっても333ビール（バーバーバー）軽いのだが味わい深い。他にサイゴンビールなどがあるが、軽すぎて頼りない。それに地元の人々はグラスに氷を入れて飲む習慣があり、日本人のようにキンキン冷やすのを好まない。果物類も豊富だが、これも冷やしていないので美味くない。ヤシの実のジュースはただの砂糖水。

2023年。この国は未曾有の経済発展を遂げている。中国からは距離を取り、日本や欧米に接近している。日本のODAで地下鉄工事も進んでいる。社会的インフラの整備はこの国最大の課題だろう。緩やかな民主化と堅実な経済成長を祈らずにはいられない。貧困の撲滅など課題山積の状況ではあるが若い力で未来を築くものにしてもらいたい。技能実習生等の受け入れ機関であるBMサービス協同組合の一員として、事業主と実習生を信頼の輪で結ぶ「かけはし」になりたいと思う。ベトナム滞在中のロータスオーシャン社の皆様には、心から

ご配慮いただきました。またBMサービスのスタッフの皆様にもベトナム行きについて完全なサポートを頂きました。おかげさまで最高の旅行となり、業務も無事に済ませる事ができました。紙面を借りて心からの感謝の意を表します。ありがとうございました。

2023. 10. 2

今号は「ベトナム紀行」を特集しましたので、【南国土佐を後にして】【社労士 野口亮がゆく】【創作ショートストーリー（しば天）】は、休載させて頂きました。

